

## ジッバーリ語の記述：フィールドワークと音響解析を援用して

## 【発表概要】

本発表は、(1) ジッバーリ語の概略、(2) 研究目的、(3) フィールドワークと音響解析の重要性、(4) 現在取り組んでいる課題、(5) 将来的展望の5つを説明した。

(1) ジッバーリ語はアラビア半島のオマーン・ズファール地方に分布する現代セム語である。音声言語としてのみ運用され、文字として書かれることはない。話者数は25,000(1993年の国勢調査)であり、危機言語状態にある。ジッバーリ語の接触言語として、標準アラビア語、ズファール・アラビア語、湾岸アラビア語、メフリ語、ヒンディー語などがある。ジッバーリ語はセム語の中でも音韻体系が複雑であり、特に子音に関して古代のアッカド語やヘブライ語より古い状態を保持している。簡単ではあるが、以上のような説明を行った。

(2) 研究目的を2つ挙げた。①共時的に、あるいは通時的にいくつかの音声現象が先行研究で明らかにされていない。その音声現象の解明が目的である。そして、②解明された現象をもとにマフラ・セム祖語の再建を行う。

(3) 先行研究(例えば、Johnstone, Thomas Muir (1981) *Jibbali lexicon*. New York: Oxford University Press.)は調音音声学的記述によってジッバーリ語の音韻記述をしているものの、その記述内容は不鮮明である。先行研究の記述を読んだだけでは分からないことが多い。そこで、発表者はこの問題を解決するために、フィールドワークと音響解析を援用してきた。機器の手入れ、録音場所の確保など、フィールドで質のよいデータをとることがいかに困難であるかを述べた。また、音響解析が耳で聞いただけでは分からないことを鮮明に示してくれる場合があるということで、音響解析の重要性を訴えた。

(4) 発表者はジッバーリ語の音声現象の解明を課題として、現在、以下のような問題点を設定していると述べた。① s-tilde の音声的実体が分らない。② 強調音の音声的実体が分らない。③ 高低アクセントが全く記述されないという問題がある。④ Johnstone (1981) を調査した所、1音節語においてストレス記号が付される場合と付されない場合があるが、その要因は何なのか分らない。⑤ Johnstone (1981: xv) によれば、ストレスが1単語内に複数箇所置かれる場合があるというが、ストレスは1単語内に1箇所だけ置かれるという原則があり、第2ストレスを認める場合もあるが、ジッバーリ語の例が第2ストレスを認めるものなのか不明である。

(5) 展望として、調音音声学的記述や音響音声学的記述だけでなく、聴覚音声学的記述の必要性を述べた。また、音声・音韻記述だけでなくジッバーリ語の形態、構文、談

話、意味など幅広い記述の必要性を述べた。最後に、ジッバーリ語話者への貢献を果たしたいということを訴えた。日本へジッバーリ語を伝え、ジッバーリ語話者へ日本語を教えることによって、日本とオマーン（中東）の架け橋を築いていきたいと発表者は考えている。この架け橋構築こそ、発表者の考える異分野融合である。言語の記述を専門とする発表者にとって、IFERI プログラム生の研究テーマ（日本語教育、経済問題、言語政策、宗教問題など）は架け橋構築のための礎となっている。

#### 【質疑応答】

本発表に対して、いくつかの質問が寄せられた。ここではその一部を紹介する。

Q：ジッバーリ語は文字言語と運用されていないということであったが、文字言語とは何か。（入山美保氏=文芸・言語専攻、角田延之氏=歴史・人類学専攻からの質問）

A：文字言語とは我々が日常的にメモをとったり、文書を書いたりする時などに使われる言語であり、話しをしたりする時に使われる音声言語とは異なるものである。音声言語と文字言語は全く異なるものである。現代の日本語話者にとって、文字言語の日本語と音声言語の日本語は、同じものであるというような錯覚がある。しかし、そもそも、文字言語と音声言語が同じ1つの言語であるという必要はない。本発表で取り上げたジッバーリ語を見ても、話者はジッバーリ語を話す時にのみ使用し、ジッバーリ語で文書を書かない。文字を書く時、彼らは標準アラビア語を使用する。従って、ジッバーリ語の正書法も存在しない。

Q：ジッバーリ語の話者数は25,000で、危機言語の状態にあるが、将来的にジッバーリ語は増えるのか、それとも減るのか。（入山美保氏からの質問）

A：ジッバーリ語を取り巻く環境を考えると、現時点では標準アラビア語、ズファール・アラビア語などの接触言語の影響を受けて、話者数は減るものと思われる。発表者としては、ジッバーリ語の記述を進め、ジッバーリ語の保存と復興を行いたいと考える。

※2008年7月から8月にかけて、オマーン・ズファール地方でフィールドワークを行ったが、その際 IFERI から支援を受けた。支援をしてくださった IFERI の方々に感謝申し上げたい。